

# 地域の教会とコミュニティ

長崎佐世保・北松・平戸・生月を中心に



後藤晴子・深堀彩香

GOTŌ Haruko & FUKAHORI Ayaka

JR佐世保駅の目の前、三浦町の丘の上に座する三浦町教会は、ゴシック建築の美しい白亜の教会で長崎第二の都市で陸海交通要所として栄えた佐世保市の入口で堂々たる様相を見せている。この三浦町教会のある佐世保から長崎県北部北松浦半島（通称：北松、以下北松と記す）に入ると、平戸瀬戸を望む小高い丘には田平教会がある。ロマネスク様式で建築されている田平教会は、長崎で数多くの教会を手掛けた鉄川与助が携わった最後の教会で、最高傑作とも評される教会である。

平戸大橋を渡って平戸島に入ると、平戸ザビエル記念教会が平戸港と市街地を見下ろす高台に座している。寺院の塀と瓦屋根の後方に見える翠玉色の鉄筋コンクリート造りの教会は幻想的だ。平戸島中央付近には、田平教会と同じく鉄川与助が手がけた白亜の<sup>ひもさし</sup>紐差教会とコロニアル様式で建設された平戸最古の教会、<sup>ほうき</sup>宝亀教会がある。平戸から生月大橋を渡って生月島（平戸市生月）に入ると、明治以降もかくれキリシタン信仰を守った人びとが多いことで知られる生月の教会のうちの一つ、山田教会に行きつく。生月にあるのはこの山田教会と巡回教会の<sup>いちぶ</sup>壱部教会のみである。

これらの教会は、近年世界遺産指定を背景に増加している観光ツアーでも人気の訪問先でもある。しかしこの地域に点在する教会はこうした歴史的に著名な教会だけに留まらない。北松や平戸の山間部および沿岸部には数多くの小教区の教会を散見することができる。これらの教会の多くは、三浦町教会、田平教会、紐差教会、宝亀教会、山田教会と同じく、禁教後の近代以降この地へ移住してきたキリスト教信徒らの努力によって建設された教会であり、どの教会も現在も信徒の大切な祈りの場所として大切にされている。

こうした数多くの小教区の教会によって、長崎県北部の山間部と沿岸部は日本国内の他の地域の山間部や沿岸部とは全く異なる景観を形成している。本稿は2020（令和2）年3月に筆者らが佐世保・北松・平戸・生月で実施した巡検をもとに教会とコミュニティについてささやかな考察を試みるものである。具体的

には、信仰とコミュニティ（地域社会）を主題とする先行研究のレビュー（2章）、当該地区での司牧経験がある司祭に実施したインタビュー（3章）、小括（4章）によって構成している。3章は深堀が、その他は後藤が主として記述した。

## 佐世保・北松・平戸・生月の宗教史的背景とコミュニティへの視座

### 1. 旧平戸藩領の教会

現在の北松・平戸・生月は江戸時代の平戸藩領に属していた地域である。なかでも平戸島の中心地区の平戸島平戸は城下町で、1549（天文18）年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルほか7名が鹿児島に上陸して1年後に訪れた場所としても知られている。

簡単に平戸藩の布教と禁教の歴史について触れておきたい。平戸藩主の松浦隆信は、当初ポルトガルとの貿易を目的にキリスト教宣教を許可し、松浦氏の重臣で生月島、度島、平戸西岸を領していた籠手田安経、一部勘解由らが洗礼を受けてキリシタンとなった〔中園 2018, 66〕。1558（永禄元）年にガスパル・ヴィレラ神父の指導で籠手田領の生月島南部、度島、平戸西岸で領民の一斉改宗が日本で初めて行われ、1565（永禄8）年にはフランシスコ・カブラル神父らによって、壱部領（生月島北部、平戸西岸）の一斉改宗が行われた〔中園 2018, 66-7〕。しかし信徒の急拡大で、仏教勢力と衝突したことから松浦隆信はキリスト教とは距離を置くようになった。安経や勘解由の没後、キリシタンに対する姿勢は一層厳しくなっていたが、1587（天正15）年の豊臣秀吉のパテレン追放令の際には生月に全国の宣教師が集まり、コレジヨ（大神学校）やセミナリヨ（小神学校）が一時避難した〔中園 2018: 67〕。1599（慶長4）年に松浦隆信が亡くなると、息子の松浦鎮信は平戸領にいる籠手田氏と一部氏に仏式葬儀への出席を求めた。しかし籠手田氏らは出席を拒んで領地を捨て、信徒領民と共に長崎に退去した。

こうして平戸藩は全国の禁教より15年も前から禁教政策を取り、旧籠手田領、旧一部領では教会堂や十字架が破却され、神社が再建・新設された〔中園 2018, 67〕。1614（慶長19）年の禁教令発令後は、平戸島西岸のキリシタンたちは寺院の檀家、神社の氏子になりながら信仰の組を維持して行事を続行。18世紀の終わり頃からは長崎の外海地方からの移住者や、五島列島、黒島を経ての移住者が増えた。開国後の1865（元治2）年、長崎に大浦天主堂が建設され、外国人宣教師が各地の潜伏キリシタンにカトリックへの復帰を促したが、なかにはカトリックに復帰せず潜伏時代の信仰形態を守り続ける人びと「かくれキリシタン」もいた〔吉田 2015, 20-1〕。

このように当地は日本のキリスト教史を考える上で大変重要な地域のひとつでもあるが、これらの区域で「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」と

して2018年に世界遺産に登録されているのは「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳<sup>やすまんだけ</sup>）」と「平戸の聖地と集落（中江ノ島）」のみである。中江ノ島は禁教期に宣教を行っていたイエズス会のカミロ・コンスタンツォ神父<sup>やいざ</sup>が焼罪で火刑に処せられた場所で、かくれキリシタンは「サンジュワン様」と呼び、彼らに聖地として信仰されていることでも知られる場所であるが教会はない。春日集落は①密かに潜伏キリシタンの信仰具が伝承されていたこと、②キリスト教伝来以前から山岳信仰の霊地であった安満岳などが在来の信仰の場であったこと、③禁教以前にキリスト教徒の墓地があった丘が聖地として密かに崇敬されていたこと等から遺産に指定されているもののやはり教会は建立されていない[吉田2015, 30-2]。よって北松・平戸・生月には世界遺産として登録されている教会はない。

ここには世界遺産の指定に際して、禁教期の潜伏キリシタン信仰に直接関係のある教会や遺跡群以外の教会堂（禁教後にカトリック復帰した人びとによって設立された教会堂）が除外されたことが関係している。しかし先に述べた通り佐世保・北松・平戸・生月地域には、江戸末期から教皇庁から日本での布教活動を委託され、日本の司牧と宣教を担当したパリ外国宣教会（以下、パリ・ミッション）が設立した拠点教会とその周辺に設立された地区・集落教会が多数存在している地域である[叶堂2018a, 23]。

## 2. 信徒の移住と教会堂建設—社会学者・叶堂隆三の研究から—

当該地域に関するキリシタン研究は、宗教史学をはじめ多彩な研究がなされている。しかし禁教以後（弾圧以後）の信仰とコミュニティ、とくに近代以降の長崎教区の地区・集落教会やその地域社会の有り様に焦点を当てた考察はそう多くはない。社会学者・叶堂隆三は、司教や関係者のインタビューと各教会が発行した記念誌、市町村史、郷土史等をもとに『「山の教会」・「海の教会」の誕生—長崎カトリック信徒の移住とコミュニティ形成』（2018年3月、九州大学出版会）および『カトリック信徒の移動とコミュニティの形成—潜伏キリシタンの二百年』（2018年9月、九州大学出版会）をまとめている。両方とも近現代の移住信徒の教会建築の経緯に関する資料性に富む著作だが、本稿ではとくに宗教とコミュニティに焦点を当てた前書を取り上げたい。叶堂は『「山の教会」と「海の教会」の誕生』では、S・ラッシュがコミュニティに関する議論の中で言及した用語である「類縁（affinity）」をキーワードに、近代以降の山間部や離島など条件不利地に開拓移住した長崎の半島・離島出身の信徒の教会建設を宗教コミュニティ形成の観点から分析を行っている。彼は長崎の半島・離島のカトリック集落を「同じ信仰をもち同業関係にある人たちのコミュニティ」で、その特徴は「信仰と生産関係を基盤にして、信仰を中心に生活全般にわたる信徒間の共同性が

存在」する「意図的コミュニティ」[叶堂 2018a, ii] とし、コミュニティ内の教会堂の設立を「意図的コミュニティ再生(形成)を象徴」するものとして定義している。

叶堂によれば、佐世保・北松・平戸の教会もまた移住した信徒によって設立された教会が多く、設立には外国修道会や外国人神父、長崎教区の邦人司教、国策と企業といった外部の社会組織、社会資源が深く関わっている[叶堂 2018a, 211-13]。叶堂は長崎県内および移住信徒によって設立された九州の他地域の教会に関して網羅的に取り上げ考察を行っているが、本稿ではとくに佐世保・北松・平戸のそれぞれの教会設立経緯について見ておきたい。以下、特段の明記がない限り、叶堂の前述の著作に依っている。

佐世保の三浦町教会は邦人の新司教が主導して建設された教会である[叶堂 2018a, 212]。1889(明治22)年、軍港に指定された佐世保は海軍鎮守府の開府後人口が倍増し、1900(明治33)年には4万人、さらに大正末期には14万人に急増していた。その結果1890年代以降市内には多くのキリスト教会や寺院が設立され、特にカトリック教会は人口の集積が進む1930年代以後に急増した[叶堂 2018a, 96]。明治期、佐世保には中心地区だった谷郷町の佐世保教会と相浦地区の梶ノ浦教会(現、<sup>あさご</sup>浅子教会)しか存在していなかった。そのため谷郷町の教会の老朽化を契機に教会新築の話が持ち上がった。当初移転・建築は八幡町に予定していたが、当時の長崎教区司教で日本人初の司教でもあった早坂久之助司教<sup>1</sup>(純心女子学園の創立者)の強い意向によりJR佐世保駅のある三浦町に建設されることになった。教会建設に際し、早坂氏は各地に遊説に出かけ資金を確保して、教会堂の建設に尽力した[叶堂 2018a, 97-99]。

一方、現在の平戸ザビエル記念教会は外国人神父の主導によって建設された教会である。平戸は、旧平戸藩の城下町であったことから明治中期までカトリック信徒の世帯はみられなかった。そのため平戸への信徒移住は他地域より後発で、信徒たちは平戸北部の大久保半島にある<sup>かみこうざき</sup>上神崎教会に徒歩で通っていた。1907(明治40)年頃に信徒世帯が30世帯を越えたことから、当時平戸・北松地区を担当していた紐差教会のパリ・ミッション所属のジャン・マタラ神父は、信徒増加と平戸島・北松地区のセンターとしての平戸の発展を見込み、巡回教会の設立を計画した。そこには信徒の身体的負担を軽減する目的もあった。マタラ神父は教会の建設費用を全額負担し、建築作業は信徒総出で進められた[叶堂 2018a, 92-95]。1910(明治43)年に完成した木造2階建ての教会は今も平戸修道院として現存している[吉田 2015, 22]。そして1916(大正5)年には、マタ

1. 1927(昭和2)年、長崎教区から福岡教区が分離し、パリ外国宣教会の管轄地が福岡教区に縮小された[叶堂2018a, 91]。



写真1：平戸ザビエル記念教会  
(2018/8/14 撮影 知人より提供)

ラ神父は更なる信徒を想定して、新教会設立を發案した。こちらが現在の平戸ザビエル記念教会だが、三浦町教会と同じく途中で早坂司教の指示で、もとの予定地から現在地に敷地変更した経緯がある[叶堂 2018a, 92-95] という。新教会は当初カトリック平戸教会と呼ばれていたが、1971(昭和46)年に聖堂脇にザビエル記念像が建立され、「聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂」と名称が変更。平戸ザビエル記念教会となったのは近年のことである[吉田 2015, 22]。平戸ザビエル教会は正面に向かって中央の高い塔の左側にある低い塔が右側にはない。資金不足で設計変更が余儀なくされたためである[吉田 2015, 23]。アシンメトリーな外観には平戸の移住信徒の苦心を見て取ることができる(写真1参照)。

平戸島中南部の紐差教会も外国人神父による主導・資金提供によって立てら

れた教会である。当地に信徒が定住するようになったのは明治初期の禁教令の高札の取り下げ後[叶堂 2018a, 24]で、旧紐差村では信徒世帯の多かった2集落に最も早く民家御堂が建立された[叶堂 2018a, 29]。田崎集落に民家御堂が設立された頃にパリ・ミッション所属のアルベール・ペルー神父が着任して田崎愛苦会(女性信徒組織)を設立し、1880(明治13)年にプチジャン司教により紐差小教区が設立した。1885(明治18)年には、ペルー神父の後任だった同じくパリ・ミッションに所属していたエミール・ラゲ神父が着任した年に紐差教会と司祭館が建設された。そして1887(明治20)年にはラゲ神父の後任だったマタラ神父が出身国のフランスに寄付を募り、信徒の支援と勤労奉仕で洋風の本造平屋の聖堂を完成させた[叶堂 2018a, 29-31]。現在の紐差教会は1929(昭和4)年に完成したもので、関東大震災以降鉄筋コンクリート造の教会建築に取り組み始めていた鉄川与助が関与し、熊本市の手取教会に続く2番目の鉄筋コンクリート作品である[吉田 2015, 26]。

紐差教会と同じく宝亀教会(写真2)にもマタラ神父が関与している。宝亀地

区は、土着のキリシタン信徒、仏教徒から改宗した信徒及び移住の信徒が混在する「重層的」な地域状況〔叶堂 2018a, 32〕だった。雨蘇（今村）では黒崎家が 1884（明治 17）年に民家御堂になったのを機に、3 年後に隣に仮教会が設立された。続いて翌年にも同地区に設立されていた他の民家御堂の横に仮教会が設立された。信徒たちはこの 2 つの仮教会を統合し新教会の設立を希望していたが、厳しい生活状況の中なかなか進捗しなかった。宝亀で教会建設が叶っ



写真2: 宝亀教会 (2020/3/26 深堀撮影)

たのは巡回指導していたマタラ神父が私財投資を行ってからである〔叶堂 2018a, 32-4〕。現在の宝亀教会はこの 1898（明治 31）年に建築されたもので、作業に当たったのは五島列島の北・宇久島出身で若い頃黒島で洗礼を受けた大工の棟梁であったと伝わっている〔吉田 2015, 24〕。全体は木造だが正面の壁と玄関部分の間はレンガ造りである。吉田によると長崎の教会建築は木造、レンガ造り、鉄筋コンクリート造へと変化していくがこの教会は過渡期にあたる作品ともいえる〔吉田 2015, 25〕。

このように外国人神父の駐在地や巡回先となった移住地では、彼らの主導・資金提供によっていち早く教会が建設された〔叶堂 2018a, 211〕。逆に言えば、マタラ神父のような外国人神父との関係性が薄かった地域では、同じ地域でもなかなか支援が得られず、教会の建設までに相当の年数がかかった地区・集落が多く存在していた〔叶堂 2018a, 211〕。たとえば田平教会（写真 3）は、外国人神父の中でおそらく最も著名な外海そとめの出津しつ教会のド・ロ神父の開拓移住地に設立された教会であるが、教会堂の設立そのものにはド・ロ神父は直接関与していない。田平地区への移住は 1866（明治 19）年に黒島教会のラゲ神父が自費で土地を買い 3 戸の家族を移住させ、ド・ロ神父が 4 戸の家族を移住させたことに始まるが、当初紐差教会の巡回地であった田平地区に教会が建てられたのは、地区への移住信徒が増え、1914（大正 3）年に小教区として独立して以降のこと



写真3: 田平教会 (2020/3/25 後藤撮影)

である[叶堂 2018a, 75-7]。1888(明治 21)年には仮聖堂が建てられていたが、1914(大正 3)年に赴任した中田藤吉神父の勧めでレンガ造りの教会を建てることになった[吉田 2015, 34]。建築の資金は信徒の積立金にマタラ神父の寄付<sup>2</sup>を加えても足りず、信徒たちは友人・知人からも資金調達を行い、信徒総出の労働奉仕によって教会が完成したのは1917(大正 6)年のことである[叶堂 2018a, 75-7]。ロマネスク様式の荘厳なレンガ造りの田平教会の建築を請け負ったのは鉄川与助で、福岡県大刀洗町の今村教会とともに有数のレンガ造りの教会として知られている。建築中に作業場の崩壊により死者が出る惨事もあり、田平教会では事故の犠牲となった人のためのミサが行われている

る[吉田 2015, 35]。

神崎(佐世保市小佐々町矢岳)も明治中期以後、平戸小教区・佐世保小教区の巡回地に位置づけられ、明治初期に小教区として独立したものの長らく教会は存在しなかった<sup>3</sup>。神崎に移住世帯が入植したのは1865(慶応 1)年3月で、その後有安家や島内家が日本人司祭を輩出したものの、地区内に教会が設立されたのは、1930(昭和 5)年のことであった。神崎には1897(明治 30)年に民家御堂が設立され、1900(明治 33)年頃には民家を転用して通称・水の浦の小聖堂等を設立していた。しかし同時期に長崎教区は叙階したばかりの片岡神父を助任司祭として派遣し、鉄筋コンクリート造り教会の設立を目指したため、自ら聖堂を設置していた信徒との間に深刻な対立が起きた。結局信徒側が長崎教区の提案を受け入れ、1930(昭和 5)年に神崎教会が落成された。神崎では新

2. 吉田の記述ではフランスの篤志家からの4000円の寄付があったとある[吉田2015, 35]。

3. 神崎はかつて陸の孤島と呼ばれ、明治中期まで北松・平戸、それ以降は佐世保と海上交通で結ばれていた[叶堂2018a, 75]。



写真4: 西木場教会 (2018/8/14 深堀撮影)

教会が2004(平成16)年に建築されており、そこでは加工業、浮敷網の水産業、養殖業者といった同業者グループ<sup>4</sup>が大きく寄与している[叶堂2018a, 121-4]。

移住信徒の増加は、さらに新しい教会の設立の契機にもなった。田平では信徒世帯に分家が生じ、新たな来住世帯が増えると信徒の居住は地区全体や周辺に拡大し、北松の新たな開拓地等に巡回教会が設立されていった[叶堂2018a, 85]。  
西木場地区にも平戸・五島・黒島から15世帯が開拓のために移住し、その後も信徒世帯が増加。1936(昭和11)年に聖フランシスコ・ザビエル渡来400年記念事業として西木場教会(松浦市御厨町米ノ山)<sup>にしこぼ</sup>が鉄川組の設計で設立された(写真4)。西木場教会は当初巡回教会だったが、

第二次世界大戦後に信徒数が急増すると西木場地区を担当したコロンバン会に所属するオーストラリア出身の神父の20万円の寄付を契機に教会新築の機運が高まり、1949(昭和24)年に聖堂と司祭館が建設され、西木場教会は小教区として独立した[叶堂2018a, 86]。

叶堂の著作の①信徒主導による民家御堂の建設が多く地域で見られること、また②教会堂の建設には外部の社会組織や社会資源(長崎教区・外国修道会・外国人修道会)とのアクセスの有無や国の政策と企業(開墾政策等)が関係していること等に関する指摘はたいへん興味深い[叶堂2018, 207-17]。一方で、こうした近代の信徒移住をもとに建設された小教区の教会が現在どのように地域に関わっているのかといった部分についてはあまり触れられていない。もちろんこれは長崎地区の教会を網羅的に取り上げ、教会建築の経緯からその全体像をつかもうとする筆者の意図によるものであろうが<sup>5</sup>、本稿の3章では司祭のインタビューをもとに多少なりとも考察を試みたい。

4. 叶堂によると、北松の主産業はもともと農業であったが、大正・昭和期に旧小佐々町で採炭が開始され人口が急増していたが、信徒が居住する神崎の主産業は水産業で、明治以降はイワシ漁が盛んな地域でもあったという[叶堂2018a, 121-2]。

5. 本稿で取り上げている神崎新教会など、近年新築された教会建築の経緯については一部取り上げられている。

### 3. 生月の教会とかくれキリシタン—民俗学者・中園成生の視角—

叶堂の先の著作のなかで、あまり具体例が取り上げられていなかった地域として生月がある<sup>6</sup>。生月は、かくれキリシタンが多い地域として知られるが、禁教後は平戸方面も担当したアルベール・ペルー神父の働きかけ（山田地区）や黒島信徒の働きかけ（壺部地区）によって1879（明治12）年ごろカトリックへ合流する人びとも現れた。その後生月島内にもマタラ神父の働きかけで、1912（大正元）年に鉄川与助の設計で山田教会が完成。その後1965（昭和39）年には壺部教会（巡回教会）も設立されている。禁教後カトリックに復帰したのは全島民の3パーセント程度で、特に壺部地区は少ない（壺部教会 HP 参照 <http://www1.odn.ne.jp/tomas/itibu.htm>（2021/2/1 閲覧））。

生月に関する研究は「かくれキリシタン」に関するものが宮崎賢太郎による研究をはじめ数多く発表されているが〔宮崎2018a, 2018b〕、コミュニティと信仰に触れる近年の成果としては、民俗学者で平戸市生月町博物館島の館の学芸員である中園成生による著作『かくれキリシタンの起源—信仰と信者の実相』（2018年、弦書房）が挙げられる。中園はかくれキリシタン信仰や信者がどのようなイメージを与えられてきたのかを概観し、各地で実施してきたかくれキリシタンに関する現地調査資料をもとに実証的に「殉教しなかった弱き者」「教義を理解せず勝手に信仰を変容された無知な信者」「弾圧を避けて辺鄙な離島に隠れた貧しい民」というステレオタイプ的な見方について否定している〔中園2018, 444〕。中園は本書で生月のみならず、九州各地のかくれキリシタンについて広く取り扱っているが、本稿では主として平戸と生月に関わる部分を取り上げておきたい。以下、特別な注記のない限りは中園の著作に依っている。

中園によると、生月で多くの人びとがカトリックに合流しなかった理由は、禁教期以後かくれキリシタン信仰と仏教と神道が並存する状況が成立しており〔中園2018, 367〕、神棚や仏壇の処遇の問題で、特に先祖を祀る仏壇を放棄する事は先祖をないがしろにする行為で、悪いことが起こると考えられたためだ〔中園2018, 68〕という<sup>7</sup>。たとえば、かくれキリシタン信仰の信仰対象物（御神体）は「お神様」とよばれるが、すべての家にあるわけではない<sup>8</sup>。一方神棚は宮司が正月

6. 叶堂〔2018b〕には生月の資料も取り上げられているが、基本的には生月ではカトリックへ復帰した人びとが少ないことが関係していると思われる。

7. 中園によると2017年時点で6000人の人口のうち、かくれキリシタン信仰に関係している人は300人足らずで、「垣内」「津元」の組を維持して行事を続けているのは4組に過ぎないという〔中園2018: 69〕。

8. 中園によると、十数軒から数十軒の信者の家で構成される垣内・津元、講などで祀る対象となっているお神様は「御前様」と呼ばれ、垣内・津元の下部組織である小組、コンパニヤではお札様を祀る。「お授け（洗札）」を任務とする御爺役は行事で用いるお水瓶を祀る。また座敷か「アダの間」に氏神の神棚（御伊勢様）、土間や玄関、台所のいずれかに荒神棚、茶の間に仏壇（先祖様）やお大師様が祀ら

頃に屋払いの祭事を行い、荒神棚は天台僧やホウニン（民間宗教者）、宮司などが家を訪れ、祭を行う〔中園 2018, 115〕。

中園は生月のかくれキリシタンの人びとの重層的な信仰実践のみならず、人びとの生活の基盤（経済的基盤）にも着目している。生月では禁教期の弾圧が沈静化した 18 世紀初頭の 1725（享保 10）年、地元生月の豊屋（のちの益富<sup>ますとみ</sup>）家が鯨組を興し、操業を開始している。この鯨組は 18 世紀を通して規模を拡大し、19 世紀初頭には<sup>い</sup>岐<sup>き</sup>漁場を掌握して網組五組を傘下に収める日本最大規模になり、その繁栄は欧米捕鯨業の進出によって日本捕鯨業が不振に陥る幕末まで続いていた〔中園 2018, 374-5〕。一方、生月の在部では農閑期の積石工や酒造りの出稼ぎが江戸時代後期から盛んに行われていた。これらはもともと捕鯨や鮪定置網に関する納屋場・突堤などの整備や、従事者に酒を供する必要から始まり、その後島外にも進出した〔中園 2018, 376〕。捕鯨終焉期の 1905（明治 38）年には小中羽鰯の巾着網漁が生月で始まって捕鯨に変わる地域の基幹産業として発達、操業形態も季節毎に様々な魚種を捕獲する周年操業が行われるようになっていった〔中園 2018, 377〕。こうした漁業とのつながりも、生月の人びとの宗教実践の中に大きく関わっており、生月島の神社では、旧暦 6 月 15 日の祇園祭と旧暦 9 月の例大祭にはかくれキリシタン信者を含めた多くの氏子が参加する御輿の巡幸が行われ、氏子の人びとは初詣、七五三、紐解き、厄、還暦など人生の様ざまな機会に参拝し、婚礼も神社で行う。また漁業関係者は大漁祈願祭にも参加するという〔中園 2018, 114-15〕。

中園は「近世以前の交通や流通の主軸が船を用いた水上交通だったことを考えると、半島や島の方が交通の便は良く、内陸の方は却って不便な場所だった。ここでも現代人の感性を捨て、「歴史の眼」で物事を見通す必要がある」〔中園 2018, 372〕と指摘している。信仰実践のみならず、人びとの経済基盤等を踏まえかくれキリシタンを、宣教師の不在によって仏教や神道との并存という信仰形態を継続させることを自ら選択し、400 年前の信仰形態を守って来た「強い人びと」として考察する視点はたいへん興味深い。もちろん本書はかくれキリシタンの実像を明らかにするという目的にあるため、生月や平戸でカトリックに合流した人びとに関する記述は限られているが、人びとの信仰の有り様を考える際、人びとが所属するコミュニティ（生業）等への着目は欠かせない視座と言えるだろう。

---

れている。かくれキリシタンの垣内・津元では年間を通して多くの行事が日曜日（ドメーゴ）に行われる〔中園 2018, 70-89〕。

## 教会と地域社会—ケース・スタディー—

これまで当該地における信仰とコミュニティに着目した近年の研究について取り上げてきたが、本章では、当該地域の教会で日常的に人びとに関わる司祭に行ったインタビューの一部(西木場教会・宝亀教会)を取り上げたい。インタビューは自身も長崎出身のカトリック信徒である深堀が行っている。

### 1. 長崎大司教区の現勢と特徴

当該地のケース・スタディーを行う前に、まず基礎情報として、カトリック長崎大司教区の現勢について、2020年9月にカトリック中央協議会から発行された『カトリック教会現勢：2019年1月1日～12月31日』をもとに概観しておこう。

現在、日本のカトリック教会には16の教区<sup>9</sup>が存在し、そのうち、東京、大阪、長崎の3つは大司教区と呼ばれる。これらの教区に所属している全信者数は約44万人で、日本の人口の約0.34%にあたる。各教区の信者率はどれも1%未満であるが、その中で4%を超える長崎大司教区の信者率は突出している。約6万人の信者を有する長崎大司教区は、教会数も132と他の教区より圧倒的に多く、教区の面積、信者数、教会数からみても日本の他の地域とは異なっていることがわかる。もっとも、この特殊性の背景にはキリシタンの長い歴史が横たわっていることは言うまでもないだろう。

長崎大司教区は、①長崎地区<sup>10</sup>、②佐世保地区、③平戸地区、④上五島地区、⑤下五島地区の5つから構成されている。この中で、本稿で取り上げている当該地が属するのは②佐世保地区と③平戸地区である。この2地区にある教会名と所在を以下の表にまとめた。なお、巡回教会<sup>11</sup>である場合には、括弧内に小教区<sup>12</sup>名を記載している。

第2章でみてきたように、長崎はその昔、潜伏キリシタンやその末裔たちによって集落ごとに教会を建設していた。そのため僻地にも教会が多く、長崎に教会が多いのはこのような背景による。その一方で、教会の数が多い代わりに、巡回教会の数も多い。そこには、人口の減少、僻地における若年層の流出、深刻な司祭不足といった問題が少なからず影響している。

9. 16の教区は北から順に次の通りである。札幌、仙台、新潟、さいたま、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、広島、高松、福岡、長崎、大分、鹿児島、那覇。

10. 長崎地区は、北地区、中地区、南地区の3つから構成される。

11. 司祭が常駐しておらず、ミサの時に定期的に巡回する教会。

12. カトリック教会の基本単位となる一定の共同体。

【佐世保地区の教会と所在】(※太字は地区長)

佐世保市	<b>相浦</b> 、大崎、浅子、横浦（浅子）、黒島、神崎、禰崎、大加勢（禰崎）、潜竜（佐々）、鹿子前、船越（鹿子前）、大野、皆瀬（大野）、俵町、烏帽子（俵町）、天神、三浦町、早岐
北松浦郡 西海市	佐々 太田尾、間瀬（太田尾）
東彼杵郡	川棚（早岐）

【平戸地区の教会と所在】(※太字は地区長)

平戸市	<b>平戸ザビエル記念</b> 、古江（ザビエル）、上神崎、宝亀、山野（宝亀）、中野（宝亀）、紐差、大佐志（紐差）、木ヶ津（紐差）、山田、壱部（山田）、田平、平戸口、福崎（西木場）
松浦市	西木場、御厨（西木場）

2. 長崎の教会と信仰に関する私見

ケース・スタディに入る前に長崎大司教区で生まれ育ったカトリック信徒である筆者の経験と私見に触れておきたい。

長崎を離れて最初に感じた違いは、祈りの場における空気である。これは非常にごく私的で感覚的な話になってしまうのだが、多くの場合、集まった人数が多かったり屋外で祈りを捧げるとなると、表面的には静かであっても、何となくざわついた落ち着かない空気が生まれる。しかし、長崎では不思議なことに、祈りが始まると同時に穏やかな静寂さと凜とした空気に包まれる。おそらくこのような現象は、先祖の時代から「そうすべき」という風潮が習慣として脈々と受け継がれ、代々子どもたちに家庭や共同体においてそうした信仰教育を行ってきたからであると感じている。

長崎は祈りの唱え方も一風変わっている。かつて文語体で祈りを唱えていた1990年代前半頃までは、長崎の信者は、まるでお経を唱えているかのように言葉としての抑揚も口を大きく動かすこともほぼなく、単調かつ比較的速い速度で、淡々と祈っていた。現在は、口語の祈りが普及したこともあり、特に市街地の教会では、他教区と同じように日本語としての言葉の抑揚とリズムが保持されている。しかし、現在も僻地（本稿で対象としている北松や平戸も含まれる）では、文語体による祈りが唱えられることも多く、また、たとえ口語体の祈りであっても、単調かつ早口で唱えるというかつての習慣が残っている地域も少なくない。県外

の信徒がそうした教会を訪れ、そこの信徒と共に祈りを捧げると、その独特の祈りの唱え方や雰囲気には驚かされることも珍しくない。

こうした祈りの唱え方は潜伏時代の名残りであると思われる。というのも、生月のかくれキリシタンのオラシヨの唱え方と酷似しているからである。筆者は生月島の「歌オラシヨ<sup>13)</sup>」研究のため、2009年頃に行ったフィールドワークにおいて、初めて実際の歌オラシヨを含むオラシヨを耳にした。その時、初めて聴いたにもかかわらず、どこか懐かしささえ感じたことを今でも鮮明に覚えている。潜伏時代のキリシタンたちは、現在のように祈りの言葉を大きな声ではっきりと唱えることはできなかった。つまり、祈る際は外部に漏れ聞こえないように細心の注意を払いながら、声には出さずに心の中で唱えたり、小声でぼそと唱えたりしていたのである。祈る速度が速いのも、このような危機管理の観点から考えると合点がいく。そう考えると、時代とともに形が変化しても、人々の間に深く刻まれた過去の歴史は、慣習となって今なお息づいているのかもしれない。

長崎大司教区では使用している祈祷書も他教区とは異なり、独自のものを出版している。その内容には長崎の習慣が反映されており、口語体の祈りだけでなく、昔ながらの文語体の祈りも掲載されている。日本のカトリック教会が多く、日本の祈りを口語体に刷新した中、なぜ文語体による祈りが掲載され続けているのだろうか。その理由は単純で、その祈りの口語訳が作られていないからである。その祈りが全国的には使用される機会は少ないため、口語体にする必要性がなかったのである<sup>14)</sup>。したがって、長崎では、全国的によく使用される祈りは口語体で、そうでない(文語体しかない)祈りは文語体のまま唱えられている。

祈り以外にも昔から残る慣習として女性信徒のヴェールの着用がある。受洗した女性信徒<sup>15)</sup>は、典礼に参加する際に頭を覆うヴェールを被ることが、1917年の教会典法(1262条2項)で定められた。そのため、明治以後の日本でもこの慣習が一般化した。ところが、第2ヴァチカン公会議(1962-1965)での典礼刷新によって、民族や地域の文化や慣習が尊重されることとなり、その影響を受け、ヴェール着用も1983年の教会典法で義務ではなくなった。したがって、現在の日本の教会ではヴェールを着用している人が非常に少なく、ミサの参加者のうち着用している人は数名、あるいは全くいないということも珍しくない。しかし、長崎大司教区の場合は、世代を問わず、今なおほとんどの女性信徒がヴェールを着用している。教会典法では義務ではなくなったものの、長崎では着用していな

13. オラシヨとは、長い禁教時代の間も口伝で継承された祈りのことを指す。歌オラシヨは、それに旋律が付された祈りの歌で、カトリック教会でいうところの聖歌にあたる。

14. 次節でインタビューに協力してくださった中濱敬司師談。

15. ただし、幼児洗礼の場合、ヴェールを被るのは初聖体以降である。

い方が不自然と思われるほどに、ひとつの慣習として根付いている。信仰の様々な要素を先祖代々引き継いできた長崎の信徒は、可能な限りそれらを守り継承していこうという思いを、少なからずどこかしらに持っていると思われる。祈りの唱え方も然り、ヴェール着用の慣習も禁止されたわけではないため、「継承」という意識もないほど自然に、そのままの慣習を維持しているのだろう。

この他、長崎大司教区には子どもたちへの要理教育<sup>16</sup>においても特徴がある。全国的には「日曜学校」という名称で呼ばれることも多く、大抵の場合は、その名称の通り、日曜日のミサ前後に子どもたちへの教育活動が行われる。しかし、長崎では要理教育が日曜日に行われることが少ないため、「日曜学校」という言葉を耳にすることはほとんどなく、基本的には「教会学校」と呼ばれている<sup>17</sup>。長崎大司教区の教会では平日に行われることが多く、必要に応じて、学年別の教育を行っている。著者自身、小学生の頃は毎週平日に2日、中高生になると週に1回、教会学校に通っていた。現在は少子化などの影響もあり、週2回から1回に減っている教会も少なくないと思われるが、平日に要理教育を行うという慣習は、教会数が多く、信徒の生活圏内に教会がある長崎だからこそ可能なかもしれない。長崎ではそれほどまで教会が身近な存在であるとも言える。

近頃、他教区では教会に鐘があっても実際に鳴らすことができない地域も少なくない。これは大晦日の寺院の除夜の鐘と同じく、騒音問題に関連する近隣住民への配慮という側面が大きいようである。自身が長崎にいた頃は、あちこちにある教会や修道院の鐘の音が騒音になるとは考えもしなかった。ミサ開始時の鐘もそうだが、正午の鐘、夕方の鐘は定刻のメロディーチャイムの役割を果たし、毎年原爆投下時刻に防災無線のサイレンとともに各教会の鐘が一斉に鳴りひびく様子は、もはや日常化している。例えば、広島平和記念公園と長崎の平和公園にそれぞれ備えられている「平和の鐘」を見比べただけでも、宗教的な違いを感じる。現在の広島の「平和の鐘」は5代目のものである。初代と2代目の鐘は西洋の教会風のベル型であったが、朝鮮戦争の影響を受けて一時平和記念式典は中止となる。式典再開後に使用された3～4代目の鐘は、近隣の寺院から借り受けた半鐘であった。現在使用されている5代目の鐘は、梵鐘製作で有名な香取正彦氏（人間国宝）によって製作、寄贈されたものである。一方、長崎の平和の鐘は、被爆33年目の1977年に建立された、西洋の教会風のベル型のものである。教会風の鐘が建立されるに至った背景には、原子爆弾がかつ

16. 次節でインタビューに協力してくださった中濱敬司師談。

17. もちろん、他教区でも「教会学校」という名称は使用されている。

てのキリシタンの町、浦上の上空で炸裂した<sup>18</sup> ことに加え、自らも被爆しながら被爆者の救護活動を行った永井隆の随筆『長崎の鐘』（1949年）<sup>19</sup> の影響も少なくないと思われる。現に、平和の鐘には「長崎の鐘」と書かれている。このように、キリスト教の信仰が少なからず長崎の文化に影響を与えていることを垣間見ることができる<sup>20</sup>。

### 3. ケース・スタディ

ここでは、平戸地区の西木場小教区の主任司祭（2017年～現在）1名と、過去に宝亀小教区で主任司祭を務めていた中濱敬司師（1999年～2006年）へ行ったインタビューを取り上げる。調査は、西木場小教区の主任司祭には2020年3月の巡検の際に対面で実施するとともに、コロナ禍の状況であることを鑑み、2021年2月に電話等を利用して補足のインタビュー調査を行った。また、中濱敬司師にも2021年3月に通信手段を使用して実施した。

#### ① 西木場小教区

西木場小教区は、西木場教会、御厨<sup>みくりや</sup>教会、福崎教会の3教会から構成される。この小教区がある地域は、カトリック信徒と仏教徒が混在している。カトリック信徒の中には農家が多く、農業の忙しさでなかなか教会へ来られない人も多いそうだ。また、地域の行事や学校行事などが優先される傾向にあるという。特に子どもの数が少ない分、部活動に入っている子どもは試合などを休むことができないため、やはりどうしてもそちらが優先されてしまう。結果として、日曜日に教会に来る子どもの数が極端に少なく、司祭は何とか来てもらえるように声掛けをしているという。長崎大司教区の教会では、ミサの際、大抵の場合は子どもが侍者をする。しかし、子どもが教会に来ないため、大人が侍者をすることもあるという。子どもたちが当番を決めて侍者をするのは、夏休みぐらいのことであるという。

その一方で、教会活動に協力的な信徒ももちろん多い。行事なども3教会合同で行っており、様々な場面で信徒たちが連携を取りながら活動しているという。これは西木場小教区のひとつの特徴とも言える。ひとつの小教区に複数

18. 長崎の原爆はキリスト教と結び付けて捉えられることが多いが、実際の犠牲者・被爆者の数は非カトリック信者の方が何倍も多い。

19. 同書をモチーフにした歌謡曲が、サトウハチロー（作詞）と古関裕而（作曲）によって同年に発売され、翌年には映画化されている。

20. ちなみに、沖縄県にある平和祈念公園の平和の鐘や、鹿児島県の知覧平和公園の平和の鐘など、全国各地に設置されている平和の鐘は半鐘・梵鐘型が多い。もちろん、ベル型のものが設置されているところもある。

の教会がある場合、一般的には教会ごとに独自で活動しており、教会同士の関わりは希薄で、協力体制はほとんどない。以前の西木場小教区も同様にそれぞれの教会で個々に活動していたが、現在は小教区内での連携が図れているという。こうした体制に至るまでには、前任の主任司祭の考えと少なからぬ尽力があったようだが、教会同士が近く、行き来しやすい場所にあるという地理的要因も関係しているだろう。平戸地区の巡回教会を持つ小教区を例に見てみると、平戸ザビエル記念教会から巡回教会の古江教会までは古江湾をぐるっと周って約 8.5 km である。2つの巡回教会を抱えている紐差教会は、大佐志教会まで約 10 km、木ヶ津教会まで約 4 km である。宝亀教会から巡回教会の中野教会までは約 9.5 km、もうひとつの巡回教会で安満岳の中腹に佇んでいる山野教会までは約 12 km ある。生月島の山田教会から壱部教会までは海岸沿いの道のりを約 5 km 進む。生月島の2つの教会は距離的にも近く、移動もしやすい場所にあるが、潜伏時代から集落間の往来はほとんどなかった。一方、西木場小教区の場合、福崎教会までは西に 4.3 km、御厨教会までは東に 3.7 km でいずれも国道 204 号線沿いにあり、道中も比較的なだらかで、往来しやすい場所にある。西木場小教区内で平日にミサが行われるのは西木場教会だけであるため、福崎教会と御厨教会から通ってくる信徒もいるようだ。これも、往来しやすい環境であるから可能となっていると思われる。

西木場小教区は平戸地区に属しているが、地区の中で西木場教会と御厨教会だけが松浦市に位置し、それ以外の教会は全て平戸市にある。毎年、焼罪田平公園（平戸市）で行われる福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭は、平戸市田平町にある田平教会・平戸口教会・福崎教会の3教会が準備や運営を行っていた。しかし、信者数減少や高齢化が進んだ福崎教会をバックアップするという形で、現在は西木場と御厨も協力するようになってきているという。反対に、御厨教会で何かを行う時は、西木場と福崎が、西木場教会で何かを行う時は、福崎と御厨と一緒に手伝うというような雰囲気があり、小教区としての結束が深まっているようである。

## ②宝亀小教区

宝亀小教区は宝亀教会、中野教会、山野教会の3教会から構成される。3教会のうち、最も世帯数が多いのが宝亀教会であり、次いで山野教会、最も少ないのが中野教会であるという。山野教会は上述したように安満岳の中腹にある。ここは、かつてのキリシタンたちが逃れ辿り着いた歴史の深い場所で、この地に移り住んで以来、彼らは主に農業を営んで生活してきた。先祖代々暮らしてきた土地であるため、現在でも集落のほとんどが同姓かつ親族関係にあるという。教会を建設した頃は、集落までの道がまだ整備されていなかったため、必要な

建設資材は信徒たちが自ら担いで山道を登ったという。初めは頑丈な鉄筋を運んでいたが、途中で断念し、資材を木材に切り替えたそうである。このエピソードからは当時の信徒たちの教会に対する強い思いや当時の集落の活気が窺える。しかしながら、現在は中野教会とともに子どもの数が著しく減少し、世帯数も少なくなってきたという。

最も信徒数の多い宝亀教会がある地域は、西木場小教区と同様、カトリック信徒と仏教徒が混在しており、カトリック信徒は大工と農家を兼業している人が多いそうである。おおよそ集落の教会というのは、そこで暮らしている家族がどういう家族か、誰が何をしているかというのも筒抜けであるという。つまり、教会に誰が来ていないか、なぜ来ていないのかという諸事情も周りにはよく知っているというのである。もちろん、それには良い面も悪い面もあるが、非常時あるいは緊急時には一致団結するという心強さもある。例えば葬儀の際には、信徒皆で協力して葬儀の世話や食事の準備などをし、皆で送り出すことが習慣になっていたそうである。

宝亀小教区も西木場までとは言わないまでも、小教区内で交流があるという。年に一度、平戸地区の教会建設のために働いたマタラ神父のお墓参りを3教会合同で行っているようだ。マタラ神父のお墓は、宝亀から紐差へ向かう途中の海辺にある。以前は紐差などと合同で墓参していたが、お墓の敷地が狭いこともあり、宝亀小教区は単独で行うようになったという。

では、この地域のカトリック信徒と仏教徒の関係はどうだろうか。第2章で取り上げた叶堂が指摘していた通り、当地は宗教的に重層的な地域で、以前は神事が異なることから、お互いに違いを意識していたようである。しかし、両者が一体となって集落での活動を行えるように、1990年頃から当時の主任司祭（中濱司祭の前任）が尽力したという。そこには、宝亀教会のすぐ下に宝亀保育園（お告げの MARIA 修道会経営）と平戸市立宝亀小学校があったことが関係している。保育園や小学校を運営していく上で、やはり両者が親密な方が活動を円滑に進められるからである。そこで、当時の主任司祭が若い親達に声を掛けるようになり、協力的な関係が築かれたそうである。特に父親の積極的な関わりがあり、地域としてのまとまりが生まれたことで、保育園や小学校の雰囲気は非常に良く、子どもたちも生き生きしていたという。このような背景から、この地域ではカトリック信徒と仏教徒のコミュニケーションが比較的取れており、司祭が保育園や小学校の行事に招待されることもしばしばあったそうである。

司祭が話してくれた面白いエピソードがある。宝亀教会のある地域に子どもた

ちが遊べる広場が整備された時、主任司祭に祝別<sup>21</sup>の依頼があったという。その依頼をよくよく聞くと、神父が祝福をした後に、神主がご祈祷をするという流れだったようだ。地域の人からの「どちらにも祝福をして欲しい」という意向があり、当日は司祭と神主とが合同で、初めに司祭が祝福を、次に神主がご祈祷をし、滞りなく式を終えたという。そして、その後、参加者が一堂に会し、一緒に食事をしたそうである。この司祭は「初めての経験だった」と語っていた。

しかし、小学校は2011年3月に閉校となり、紐差小学校へ統合され、保育園も2013年3月に閉園した。それにより、子どもに関する様々なことは紐差の方へ流れていった。若年層の流出によって少子化が加速し、現在、小教区内は信徒数の減少と高齢化が進み、変化の時を迎えつつあるという。

### 結びにかえて

さて、最後にささやかではあるが多少なりとも考察を試みたい。第3章では自身も長崎出身のカトリック信徒である深堀が自身のごく私的な体験を取り上げているが、深堀の記述にある通り、長崎大司教区は地域の歴史的文化的背景が日々の信仰活動の中にも根付いており、祈りの言葉、ヴェールの使用、どこか言語化しがたい空気感として立ち現れていることが分かる。またこれら指摘は長崎大司教区に共通のものもあれば、それぞれの小教区ごとに培われているマイクロな要素も窺える。

また西木場と宝亀の事例からも分かる通り、当該地域ではカトリック信徒と仏教徒が混在している重層的な状況にあり、そういった状況なかで教区の司祭たちはおおよそ数年ごと（3年1期で2期6年がおおよその目安で必ずしも2期で移動になるわけではない）に転任する地域ごとの実情に合わせた教会活動を迫られている。また現在の信徒たちのコミュニティは叶堂の指摘にもあったように生業コミュニティとも深く関わり、少子化や高齢化が進む地方の寺社がそうであるように、長崎の当地の小教区の教会もまた少子化と高齢化から例外ではない。一方で西木場の例にもあったように、他地域ではあまり見られない教会同士の連携による小教区の結束が、長崎の他の地域から移住してきた信徒によって近代期に形づくられた信仰のコミュニティによって下支えされており、信徒が減少した現在もなお機能している点は興味深い。少子化による小学校の統廃合により中止してしまったものの、宝亀教会の1990年頃から宗教を越えた積極的な交流

21. 聖職者が人や物を神へ奉獻する儀式、あるいはそれらの上に神の恵みを願い求める儀式のこと。祝福とも呼ばれ、共同体の生活や活動が神の恩恵のもとに新しく始められることを感謝し祝う（『新カトリック大事典』第3巻、202-4「祝福」「祝別」の項）。

は、当該地ならではの活動であったともいえよう。

もちろん本稿で取り上げることのできた事例はごくささやかなものに過ぎない。こうした活動が他の教区ではどのように行われているのか、信徒側はそのような教会の取り組みをどのように考えているのか等、については今後の考察の課題としたい。

長崎の地域の宗教的背景を考える上でカトリック教会は欠かせない要素だが、地域とコミュニティの議論において寺社のそれに比べ教会コミュニティはこれまであまり議論にあがってこなかったように思われる。そこには日本においては仏教をはじめ、社会科学的な教団研究が今なお限られていることも関係しているとも考えられるが、2章でふれた先行研究にもある通り当該地で生きる人びとを考察しようとする場合、小教区の教会を含めた共同体に関する視座は必要であるに違いない。

謝辞 写真の掲載の許可をいただきました長崎大司教区と、お忙しい中インタビューにご協力いただきましたお二人の神父様に篤く御礼申し上げます。

## 参考文献

一般財団法人千里文化財団（編）

2020.『季刊民族学 特集 キリスト教受容のかたち, 世界史のなかのかくれキリシタン』174号、一般財団法人千里文化財団。

カトリック中央協議会司教協議会事務局広報課（編）

2020.『カトリック教会現勢：2019年1月1日～12月31日』カトリック中央協議会。

叶堂隆三

2018a.『「山の教会」・「海の教会」の誕生：長崎カトリック信徒の移住とコミュニティ形成』、九州大学出版会。

2018b.『カトリック信徒の移動とコミュニティの形成：潜伏キリシタンの二百年』、九州大学出版会。

新カトリック大事典編纂委員会（編）

2002.『新カトリック大事典』研究社。

中園成生

2015.『かくれキリシタンとは何か—オラショを巡る旅』、弦書房。

2018.『かくれキリシタンの起源—信仰と信者の実相』、弦書房。

宮崎賢太郎

2018a.『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』、角川出版。

後藤晴子・深堀彩香

2018b.『カクレキリシタン 現代に生きる民俗信仰』、角川出版。

吉田さらさ

2015.『長崎の教会—平戸、長崎、五島、祈りの地を巡る』、JTBパブリッシング。

ごとう・はるこ  
南山宗教文化研究所  
ふかほり・あやか  
南山宗教文化研究所